



別添資料3

【小中学校用資料】

不登校の未然防止に向けた小中学校の円滑な接続のために

不登校は、中学1年生で小学6年生の約3倍に増加します。国立教育政策研究所の調査によると、中学1年生の不登校生徒の70%近くが小学4年生以降に何らかの兆候を示しており、中学校入学後に、生活面や学習面で不適應を起こしやすいことが明らかになりました。不登校の未然防止には、中学校に入学する生徒に関する丁寧な引き継ぎや、不安感を取り除く取組等、小中学校の円滑な接続を図ることが必要です。

<p>小学校</p> 	<p>小学校児童及び保護者に対する、中学校からの効果的な情報提供</p> <p>学校としての取組事例</p> <p>(1) 中学校区での総合的な小中学校連携 ①徳島県での事例</p> <p>(2) 中学校でのオープンスクールや体験入学 ①宮崎県の事例 ②奈良県の事例</p> <p>(3) 小中学校合同イベント ①神奈川県・宮城県での事例</p> <p>(4) 地域共通の「生活のきまり」 ①長崎県の事例 ②群馬県の事例</p>	<p>小学校時</p> <p>〈2学期〉</p> <p>〈夏休み～3学期〉</p> <p>〈年間を通して〉</p> <p>〈年間を通して〉</p>
<p>中学校</p> 	<p>不登校及び不登校傾向のある児童に関する、小中学校の効果的な連携</p> <p>学年学級としての取組</p> <p>(1) 中学校入学前の丁寧な引き継ぎ</p> <p>(2) 中学校入学後のフォローアップ</p> <p>国立教育政策研究所の調査</p> <p>(1) 対人関係への配慮</p> <p>(2) チームによる対応</p> <p>(3) 対人関係の改善</p> <p>(4) 学習面の改善</p> <p>(5) 長期休業中の取組</p>	<p>中学校入学前から入学後にかけて</p> <p>〈3月末～4月初め〉</p> <p>〈5月中〉</p> <p>〈年間を通して〉</p> <p>〈年間を通して〉</p> <p>〈年間を通して〉</p> <p>〈年間を通して〉</p> <p>〈長期休業日〉</p>

※ 特別支援学校については、「学校」を「学部」に読み替えてください。

1 国立教育政策研究所の調査

- 中学1年生時に不登校になった生徒の70%近くは「不登校（傾向）経験あり」群に分類される。
- 中学1年生時に不登校になった生徒のうち、「経験あり」群の生徒は4月から5月上旬にかけての時期に欠席が目立ち始めるのに対して、「経験なし」群の生徒は夏休み明けから欠席が目立ち始める。
- 「経験なし」群の欠席の原因の一つとして、学業不振が考えられる。また、「経験あり」群の生徒にも、学業不振が目立つ。

国立教育政策研究所「中1不登校生徒に関する調査」から

(1) 対人関係への配慮

- ① 小学校から引き継いだ情報を参考に学級編制を工夫する（4月初め）
- ② 生徒の緊張をほぐすようなレクリエーションや、楽しい「自己紹介」などから学級開きを行う。（4月初め）



入学当初は、どの生徒も緊張しています。そうした緊張をほぐすようなレクリエーションや、楽しい「自己紹介」などから学級開きを行う工夫なども必要です。もし、学級担任がそうした対応が不得手なようなら、学年で取り組んでも構いません。ここでも、学級担任まかせにしないことが大切なのです。

国立教育政策研究所「中1不登校の未然防止に取り組むために」から

例：「ぼくとわたしの好きなもの」「ぼくとわたしの共通点」

○座席のとなりの子と好きなものを言い合う。

例えば、「わたしの好きなスポーツは、テニス。」「ぼくは、サッカー。」 等
「ペンケースの色が同じだね。」「お互いにめがねをかけているね。」 等

○話相手を座席の前後やグループ等でかえてみる。

○朝の活動等の短時間で実施でき、頻繁に実施すると互いに知りあうことができ、安心感・安全感に満たされていく効果が期待できる。

(2) チームによる対応

- ① 「経験あり」群の場合、累積欠席日数が3日になったら、チーム（生徒指導主事・主任、養護教諭、学級担任、スクールカウンセラー等）を編成し、情報を共有する。
- ② 本人や保護者との対応、その反応等を記した個人記録票を作成する。
- ③ スクールカウンセラー等による対応方針を立て、対応の役割を決定する。
- ④ 週に1回程度のケース会議を行う。

(3) 対人関係の改善

- ① 対人関係の苦手意識に対する支援を工夫していく。
- ② 「心の居場所」を確保することではなく、より積極的な「絆づくりの場」を提供して、自己有用感・自己存在感を獲得させる。

(4) 学習面の改善

- ① 児童生徒が学ぶよろこびを感じられる「わかる」授業を実施する。
- ② 習熟度別・少人数の授業を実施し、きめ細かな指導の充実を図る。

(5) 長期休業中の取組

- ① 欠席が目立つ生徒に教育相談等を行う。
- ② 「経験あり」群の生徒の中には学業不振傾向がみられることもあり、本人や保護者の希望をふまえて補習授業を行うなど、学力補充に取り組む。
- ③ 「経験なし」群の生徒についても、学業不振が理由で長期休業日後に欠席することのないよう、必要に応じ、補習授業を行うことも効果的である。



生徒全員を対象に行う一般的な個人面談や、希望者を募って行う補習授業とは、ねらいが異なる点に注意してください。夏休みの期間をどのように活用すれば不登校の「未然防止」になるのか、生徒の実態に応じたていねいな対応が望まれます。

国立教育政策研究所「中1不登校の未然防止に取り組むために」から

2 学校としての取組事例

(1) 中学校区での総合的な小中学校連携（徳島県）

- ① アンケート
 - ア 小学生が、「中学校生活について知りたいこと」を答える。
 - イ 中学生が、「小学生の時と変わったこと」を答える。
- ② 情報提供
 - ア 日課表，定期テスト時間割，校内見取り図
 - イ 小学生の質問に対して，中学1年生がその答えを示したもの
 - ウ 中学生に対して行ったアンケートをまとめたもの
- ③ 小学校での事前授業
 - ア アンケート結果を授業に生かす
 - イ 体験入学前に実施する（10月頃）
- ④ 中学校の見学（10月末から11月）
 - ア 校舎等の見学
 - イ 学校紹介ビデオやスライドショーの視聴
 - ウ 質疑応答，アンケート記入
- ⑤ 小中連携コーディネーターによる調整
 - ア 中学校に校区内の小学校との連携について担当するコーディネーターを校務分掌に位置づけ，連絡調整にあたる。



[効果]

中学校の生活についての予備知識を得るとともに、中学校生活への不安を解消し、目的意識や期待を持たせ、中学校入学後の生活を円滑かつ前向きに送るための一助となる。また、担当者を明確にすることで、小中連携を円滑に推進することが可能となる。

(2) 中学校でのオープンスクールや体験入学（宮崎県・奈良県）

① 宮崎県の事例

複数回にわたって新入生体験入学を行うことで、違う学校から進学する児童や保護者が、同じように中学校の状況や中学生の様子を知り、中学校に関して情報を共有する。

(例)

第1回新入生体験入学…夏季休業中
学校説明（教務主任・生徒指導主事
学校紹介（生徒会）

体験授業

部活動体験説明（体験授業クラス）

部活動体験

第2回新入生体験入学…2学期後半
授業参観

体験授業

（期待と目標を抱かせるための、

楽しくわかり易い教材で）

部活動自由参観・個別相談

[効果]

中学校の生活についての予備知識を得るとともに、児童や保護者の中学校生活への不安を解消し、中学校生活へ希望がもてるようになる。



② 奈良県の事例

ア 校区内小学6年生全員の体験入学

a 授業体験

授業体験では、実技教科や数学、英語の授業もある。授業担当の教員は、小学6年生の中学校への不安を払拭し、期待と目標を抱かせるための楽しくわかり易い教材を準備し、小学生が授業を聞くだけでなく、直接参加のできる工夫をする。

b 部活動参観

校舎内外で行っている文化部と運動部全ての部活動を参観する。

[効果]

体験授業や部活動の参観を通して、児童の中学校生活への不安を解消し、中学校生活へ希望がもてるようになる。

イ 中学校教員による出前授業

a 2月頃実施

b 小学6年生の教室で一緒に給食を食べながらの交流

c 中学校教員が授業参観

中学校生活の紹介

e 質疑応答

[効果]

小学校の早い段階で中学校への理解を促進し、中学校入学時点での不安を和らげるとともに、円滑な中学校生活の実現を図ることが可能となる。



(3) 小中学校合同イベント (神奈川県・宮城県)

- ① 地域ふれあい体験学習
 - ア 地域交流 (和紙の折り紙, 三味線, 茶道等)
 - イ 福祉交流 (点字, 盲導犬・アイマスク, 手話等)
- ② 陸上練習会 (競技種目練習・応援練習)
小学校の陸上大会に向けて, 中学校の陸上部とともに練習する。
- ③ 合同演奏会 (練習会も含み, 夏休みなどに小学校に出向いての合同練習)
- ④ 合同地域清掃
- ⑤ 中学生が, 出身小学校で中学校生活の説明
- ⑥ 里帰りあいさつ運動
中学生が出身小学校でのあいさつ運動

[効果]

小学生が中学生の先輩たちや中学校生活に憧れをもつことができるとともに, 異年齢集団との交流による刺激が生まれ, スキルアップにつながる。

(4) 地域共通の「生活のきまり」作成事例 (長崎県・群馬県)

① 長崎県の事例

小中学校で, 地域の子どものきまり「生活のきまり」を合同で作成し, 保護者や地域にも配布する。

例 ~生活のきまり~ (小中合同の生活のきまり)

- ・ 早寝早起きをしよう!
自分で起きよう 小…午後9~10時までに寝よう 中…午後11時までに寝よう
 - ・ 朝食をしっかりとろう!
朝の脳は腹ぺこ よくかんで食べよう
 - ・ 毎日学習しよう!
学習時間のめやす
- | | |
|---------|---------|
| 低学年…30分 | 中1…120分 |
| 中学年…60分 | 中2…150分 |
| 高学年…90分 | 中3…180分 |
- ・ 毎日本を読もう!
いろんな種類の本を読んでみよう 図書館を活用しよう

[効果]

子どもたちの生活習慣等の実態を把握することで, 子ども理解と一貫した継続的な指導が可能となり, 子どもへの支援が充実する。

② 群馬県の事例

ア「生活の心得」の作成

- a 中学校は「厳しい」, というマイナスイメージの払拭
- b きまりの整理による, 小中学校9年間の教育活動を見通した連続性の確立

[効果]

子どもたちが小中学校の9年間の望ましい姿を見通すことができ, 中学校入学時に, 小学校生活とのギャップに悩まず生活できる。



学習面での小学校と中学校の違いについて

- 教科ごとに教えにくる先生が替わります。
- 「英語」と「技術・家庭科」が始まります。
- 「算数」が「数学」になります。
「図工」が「美術」になります
- テストの仕方が変わります。
定期テスト（中間テスト・期末テスト）があります。
小学校では、小さいテストがたくさんありましたが、中学校では、実力テストなど、まとめてテストが行われます。

3 学年学級としての取組

(1) 中学校入学前の丁寧な引き継ぎ

基礎的情報の収集と分類

- ① 新中学1年生の全生徒について、小学校4～6年生時の欠席、遅刻、早退等の情報を入手する。(3月末)
- ② 「不登校(傾向)経験あり」群、「不登校(傾向)経験なし」群等の分類を行っておく。(4月初め)
- ③ 新中学1年生配属予定の教員が、小学校時に不登校だった児童に対し、必要に応じて、中学校舎内を案内するなど、春休み等を利用して中学校の環境に慣れさせることで、中学校入学に際しての安心感を持たせる。(春休み中)

(2) 中学校入学後のフォローアップ

情報の収集

中学校入学後、実態把握ができた早い時期(5月中)に、中学1年生担任と小学校との連絡会をもつ。中学校入学前に連絡会を実施しているが、実際に新1年生を担当することで、生徒に対して情報交換したいことができるため、再度連絡会をもつと効果的である。具体的には、1の(1)から(5)が参考となる。